

セラピストが“秘密を守る”ことをめぐる一試論

— 世阿弥の「秘すれば花」から学ぶ臨床実践 —

坂井 新

1. はじめに

あるシンポジウムにシンポジストとして参加していた時、フロアから、まだ駆け出しの臨床家と思しき女性からの質問を受けた。「私はいつも現場でケースを抱え込みすぎだ、とスタッフから言われてしまいます・・・どうしたらいいでしょうか。自分にも問題があるのはわかっているのですが・・・」というような簡潔な質問であった。彼女の臨床に対する真摯な姿勢が伺えたと同時に、背後にある現場での切実な思いも受け取ることができた。筆者を含めたシンポジストは、言外の意味を察知し、そこに隠された本質的問題を共有していた。それは実践現場での、心理療法という臨床的営みにおける守秘義務と現場の人間関係とのほざまで、臨床家もがき苦しむという問題である。その典型例は、他職種から、臨床心理士の仕事を評して「何をしているのかよくわからない」と言われることであろう。いったい密室で何をしているのかという問いである。我々は彼らが望むような具体的な答えを上手く返すことはできない。ではそれは何故なのか。まずそこに、密室で行われる心理療法の中で起こっていることを第三者に説明する言葉を持ち難い現実がある。もう一つは、我々が専門家として有する職業倫理としての守秘義務に起因している。

東山（1999）は「臨床心理士にとって守秘義務は当たり前のことである」と指摘し、臨床心理士がもともとは秘密を保持できる世界で仕事をしていた時代には、上記のような問題は起こりえなかったと述べている。しかし筆者はここに「守秘義務が当たり前のことである」と言い切れるほど、楽観的な物言いができない。なぜなら実践現場において、我々はクライアントを守るために守秘義務を行使するが、その一方で第三者から内容の開示を求められるという逆説性を体験せざるを得ないからである。そもそも心理療法自体、クライアントが本来“秘密”にしている内容を暴露しなければ始まらないという関係性からして逆説的なのである。

よってこの論述では、専門的の秘密（東山，1999）や守秘義務という言葉だけではなく、クライアントとセラピストが心理療法という営みの関係性において紡ぐものとしての“秘密”について言及したいと考えている。“秘密”を通して、我々臨床家が「秘密の逆説性を生きる」ことの意義を問いたい。しかしその前に我々は、その「秘密の逆説性」に無自覚であることが多い。ゆえにまず、心理療法にとって何が秘密なのかを問うことで「秘密」を定義づける。次に改めて心理療法における守秘義務について問い直し、「秘密の逆説性」を明確化する。そして「秘密の逆説性」についてのセラピストの自覚について臨床事例に立脚する。そのような自覚の先

には何があるのか。

ここで複式夢幻能（能楽）と呼ばれる約600年以上の伝統を持つ日本の古典芸能を初期に大成させた世阿弥の言葉を参照する。坂井（2012）は、心理臨床の諸問題を、複式夢幻能という世界的にも特異な演劇を使用して、アナロジックに語りうることを文献的に整理した（金関、1999、森岡、2010 など）。特に今回テーマにする世阿弥の示唆的な言葉は、臨床家の成長や内的構えや面接上技法を語る上でアナロジーとして使用しやすいという側面がある（前田、1999）。よって世阿弥の伝書における「秘すれば花」という言葉を参照することで、今回のテーマである「秘密の逆説性」を、臨床事例ヴィネットからセラピストの内的事態を通して何が理解するのか、臨床実践の事態への手掛かりを得る。最終的に臨床家が「秘密を守る」ことは「秘密」の逆説性を生きることであることを言及し、最終的に「秘密とは何か」の一試論を述べることを目的とする。

2. 心理療法にとって何が“秘密”となるのか

『広辞苑』（新村、1988）によると、“秘”とは、①ひめること。隠すこと、②人知ではかりしれないこと、③通じが悪いこと。とされている。また“秘密”は①かくして人に知らせないこと。公開しないこと。また、その内容。②おくのて。ひじゅつ。③（仏教用語）真言の教え。密教。密意。仏が理由あって秘した教えと定義付けられている。「秘」「密」の語源を辿ると、両方の語とも神を祀ることに由来し、祖先の霊の安寧（やすらかであること）を求める儀礼を「密」、そして必を供えて祀ることを「秘」といい、両方は秘儀として行われたので「ひそか、ひめる、かくす、やすらか、こまかい」の意味に繋がり、それらを合わせた秘密は、「隠して人に知らせたり見せたりしない」こととなる（白川、2003）。「秘密」を単純に英語に訳すなら“secret”となる。実は“守秘義務”は“confidentiality”と訳されるのである。となると、日本語における秘密を基とする“守秘義務”と“confidentiality”の意味には微妙なズレが生じているようにも思えるが、ここでは若干内容が逸れることになるので後の章で詳述する。

改めて、秘密をめぐって、我々臨床家が何をしているのかという単純な問いに立ち戻る。心理療法的二者関係とは、クライアントの「秘密」を、セラピストとの関係において開示し、再度その関係の中で“秘密”にすることにおいて成立するものである。河合（2013a）は、心理療法を行う場所を取り上げ、セラピストがクライアントの内界に接することは、密室のような限定された空間によって守られているから可能であると同時に、閉じられた空間だからこそ、クライアントの内界の働きが豊かに表出されるという背反的な側面を「密室のパラドックス」として言及している。密室だからこそ、セラピストとクライアントの関係において紡がれる“秘密”が含まれる。という意味では、密室にパラドックスが存在する限り、“秘密”にも逆説性が存在しうると考える。そこで秘密を、心理療法におけるクライアントの内界の「秘密」を開示することで、セラピストクライアントの関係性の“秘密”へと転換する素となると考え、クライアントの“変容の種”と定義づける。それぞれが重なりあうが、以下にて秘密を一般的な秘密と、一者で語られる「秘密」、そして心理療法の二者関係で語られる“秘密”に分けて述べる。

3. 心理療法の守秘を問う

①守秘義務

そもそも守秘義務とは何か。守秘義務の原点として医師の倫理綱領である「ヒポクラテスの誓い」を参照する。そこには「患者のことで表に出すべきではない知識については秘密を守り、決して発表したりすることはしない」と掲げられている。そして臨床心理士の倫理綱領（日本臨床心理士会，2009）には、守秘義務という職業倫理を負うと明確化されている。ところが、ここで守秘義務とは何かという問いについての答えはどこにも見当たらない。守秘の問題に目を向ける臨床家や研究者は、単に秘密を守ればよいという主張だけではすまず、守秘義務や秘密保持がきわめて複雑かつ深淵な問題であることを共有している。にもかかわらず、心理臨床の基本を学ぶための在り方を説きながら、契約・構造化などの大切さを詳細に語ることはあっても、守秘についてはやはり前提のごとくわずか触れられるにすぎないことが多い（東山，1999、松木，2005、河合，2013a、など）。Freud(1938)は、精神分析理論の概説をする中で、精神分析の明快な体系づけを行っている。そのような分析状況を成立させる前提として、守秘について、さも当たり前のように、「われわれの方は、厳格な秘密厳守を行うから、その代わり患者の方は・・・（傍点は筆者挿入）」と触れているのみである。Freud でさえも、分析者側の被分析者の秘密を守るという行為自体には、深くは触れていない。それは前述の東山（1999）が「臨床心理士にとって守秘義務は当たり前のことである」と述べるくらいに自明なものようである。金沢（2006）は、前述した“守秘義務”の英語訳が“confidentiality”であることに注目している。その名詞形の語源は、現代英語の confidence に相当するラテン語の *confidentia* であり、派生的に現代英語で confide は、もっとも古い意味として「信頼する、信用する」であると言及し、我々臨床家は、信頼や堅い信用に基づいた態度を核として、「強い信頼に基づく秘密保持」と定義付けし、守秘義務の自明性を捉えなおしている。

②「秘密を守る＝守秘」とは

このように守秘義務の自明性を詳細に眺めると、改めて一つのことに気付かされる。それは守秘を語る時に、制度や規則が必ずセットになるという事実である。それは義務という言葉に表されている。つまり心理療法の“秘密”を語ると、同時に現実社会における秘密を語る必要があるのである。実践現場にて、まず守秘義務が語られるのは、どうやら他職種との連携においてである（西井，2003、北添ら，2005）。守秘について、他職種の制度や規則と、我々臨床家のそれとの意識水準のズレが明らかになり、そのズレは、実際の意識調査でもはっきりしているようである（江畑ら，2003、北添ら，2005）。このようなズレを修正するために臨床家の側は、クライアント＝当事者の利益に繋がるのであれば、援助者同士の秘密の共有は許容される“集団守秘義務（長谷川，2003）”という、いわば制度を作ることもある。

人が人に対して負う責任とは何か、と問うた時、臨床家が、クライアントの「秘密を守る」ことはその責任の一つである。それは、守秘義務という言葉の下、まるで暗黙の了解のようになっているという現実には前述したとおりである。では実際問題として、臨床家誰もが、本当にクライアントの秘密を守っているのだろうか。金沢（2006）は、内外の調査において、しばしばクライアントの秘密が第三者に開示されている実態が明らかであることを指摘している。この事実を真摯に受けとめ、人にとって秘密保持には限界があることを認め、その対処方法を説いている。このような方法論が語られ始めると、臨床心理の分野における職業倫理を確立さ

せる必要があるというような議論になる。結局秘密は守るべきという規則を基盤とした義務が優先された考えが中心となるのである。しかしここで我々がこのような現場の実際問題から学ぶべきは、上記のような金沢の調査研究の実態こそが、実は臨床的な事態なのだと誠実に認めることから始まる倫理と臨床なのではないだろうか。

こうしてみると「秘密」が心理療法における“変容の種”だとするのなら、その種は非常に小さいからこそ、いつの間にか見失い捨てられてしまいやすいのかもしれない。だからこそ我々臨床家は見失いやすい種を守るために必死で抵抗する。なぜならその種が非常に大切であることを直感的に知っているからである。ここに臨床家には、背反的で逆説的な事態が現前としてあることを認めねばならない。クライアントとの二者関係によって紡がれる“秘密”を守るということは、その関係性において、結果的にセラピスト自身の秘密をも守ることになり、第三者とクライアントの間での綱引き状態という葛藤状態に陥るのである。そこに逆説性が存在し、「秘密を守る」ということを通して、我々臨床家はセラピストとして、この逆説性をどのように生きるかという問いを持ち始めるのである。

③臨床心理学の「秘密」

小此木（1980）は、「一つの秘密をもつことは、一つの新しい世界の成立を意味する」と述べている。この言葉に代表される“秘密”の心理学的意義は、個人が秘密を保持していく過程において、自と他を分け、その個人としてのこころを成長させ、その存在の独自性をはっきりさせる。同時に個別的な秘密を付随する痛みや苦しみといった情緒とともに、他人と共有していくことで個々人がより発展していく。そのようなこころの成長にとって秘密は、重要な心理的要素であると考えられている。それは土居（1973）、小此木（1980、1986）、河合（1987）、Hillman（1964）等の、学派を超えて共通の認識である。

それぞれの特徴的観点を上げると、河合（1987）は、物語や事例を引用しながら、子どものこころの成長において、秘密の意義や重要性を説いている。同時に臨床家は、秘密を保持し過ぎることの否定的な側面も含めて「多くの個人の秘密を聞き、それを守り通さねばならない。そのためには、相当な心の統合性と安定性を持っていなければならない。……文字どおり体を張って行く職業である。」と平明な文章で厳しく述べているのが印象的である。このようなセラピストが秘密を抱えることの意義を、極めてクリアに提示しているのは、土居（1973）であると思われる。秘密とは「外からは容易にうかがい知れない内に秘められたものを意味する」と定義することで、我々臨床家の心理療法の一つの対象としての精神病理を「秘密故に悩むことである」と捉え直している。精神療法の目的とは、秘密をなくすことではなく、秘密はどこまでも秘密であるから、いったん明るみにするのは、再び秘密としてしまわれねばならないからと論じている。その為の原理原則は、心理療法関係の中で秘密を守るという意味にも繋がるのではないであろうか。

Hillman（1964）は、人間のこころの奥にある魂を常に射程に入れ、Jung のいう分析の器を成立させる前提は、セラピストが秘密をいなくすることであると述べている。だからこそ恥や隠すことが、実は美德であることを見過ごさないこと、そして心理療法において美德が機能するためには、秘密のままにしておかねばならない過程があることを知らねばならないと論じている。土居とHillmanの両者に共通する点は、セラピストが秘密を抱えるということ、心理療法の

二者関係の中での原理原則と明確に位置付けて論じていることである。これらの秘密の位置付けは、心理療法的二者関係において“秘密”は、まずクライアントの内的に隠されたものと思いがちだが、まずはセラピスト側の“秘密”に対する姿勢を問うことこそが、それに先行するという意味として捉えられるのである。つまり本来秘密を明らかにしたりする役目であるようなセラピストにも、それを抱く必要性があり、セラピストは秘密をめぐる、逆説的な在り方をクライアントと共に生きる必要があることを暗に示していると考えられる。

4. “秘密”の逆説性

前章にて心理療法の守秘を問うことで、秘密をめぐる逆説性が徐々に明らかになってきた。この章では、その逆説性がどのような時に生じ、その時どのように立ち現れるか明確化する。

筆者は「秘密」はクライアントの“変容の種”だと定義付けたが、その種をめぐる我々臨床家は二つの次元で逆説的な立場にあると思われる。まず一つの次元は、密室の中で行われる原理的な二者関係の心理療法の中で浮き彫りになり、もう一つは第三者、現実社会、制度、規則、環境との関係性の次元で明らかになる。河合(2013b)は、「われわれが心理療法を通じて迫ろうとする「個人」は、それ自身ひとつの「世界」であるとさえ思われる。ここに人間、あるいは人間の心の秘密がある・・・(傍点は筆者挿入)」と述べている。このような個人＝世界に迫るためにセラピストは心理療法の中で、人間のこころの秘密を暴かねばならないのである。ここにまず前者の次元の逆説性が浮き彫りになる。前述したように秘密は人間のこころやその成長にとって、大変意義のあるものである。まずセラピストは、“秘密”を大切にしなければならないという面と、心理療法にてクライアントに迫るのであれば“秘密”を暴かねばならないという面が、同時に立ち現れる。そしてセラピストは自らの姿勢において、クライアントの「秘密」を暴きながら、そしてその「秘密」を自らの中に抱えるという作業も同時にするのである。ここにセラピストにとって二重の逆説性をも立ち現れるのである。よってそのことにより「秘密」は“秘密”になり、そして次の次元の逆説性へと繋がる。それは臨床家であるセラピスト・原理的な心理療法的関係と、第三者、現実社会、制度、規則、環境との関係性で明らかになる。心理療法における“守秘義務”をめぐる、クライアントとセラピストの関係性で紡がれる秘密を、第三者から守ろうとすることで生じる逆説性である。セラピストは密室で行われる心理療法の関係をもっとも大切にするという面と、そのようなセラピストは社会の一員であるという面があり、セラピストの内的状態はクライアントの秘密をめぐる綱引き状態の葛藤を抱えることとなる。前章で述べた、他職種との連携や“集団守秘義務(長谷川, 2003)”などは、このような臨床家の葛藤と社会との妥協点として生じてきたともいえる。

ところで、「原理的な二者関係の心理療法の中で浮き彫りになる次元(以下「心理療法の中の次元」とする)」と、「第三者、現実社会、制度、規則、環境との関係の次元(以下「社会との関係の次元)」という、二つの次元で“秘密”を語るとき、その次元の同時性によって、実際の現場では“秘密”という“変容の種”の取り扱いに困り、混乱をきたすことが多い。つまりこの二つの次元においてもセラピストはズレをきたし、ここにおいてさえも逆説的にもなりうるのである。もっとも“変容の種”を大切にしなければならないはずのセラピストも、その二者関係において、クライアントの秘密ばかり注目してしまい、いつのまにか自らが頑になる

ことによって、その種を見失いがちになる。社会や制度といった大海原では、その種は非常に小さいからこそ、いつの間にか見失い、捨てられてしまいやすいのかもしれないという事実を物語っている。しかしこのような「秘密」という“変容の種”を見失いがちになるということ自体が、実は心理臨床的事態であり、それこそを再度心理療法の中で取り扱うことが重要になってくるのではないだろうか。一方で、我々臨床家にとってこのような事態は簡単に理解や自覚できるものではないことも確かなのである。

5. 臨床事例ヴィネット

この章では通常の事例提示とは違い、セラピストとクライアントの心理療法的二者関係を中心にしなが、それにまつわる“秘密”を、社会から脅かされたと感じたセラピストの主観体験をヴィネットとして取り上げる。よって心理療法過程やクライアントの情報は、セラピストの体験を語る上での必要最小限の記述に努め、内容も改編を加えた。

<臨床事例ヴィネット①>

ある児童養護施設にて小学校低学年の男子 A とのプレイセラピーを中心としたセラピスト（以下 Th）の体験である。A は、両親が家出をし、祖父母に引き取られていたが、養育困難となり施設入所になった。先天的な軽度の難聴を抱え、注意欠陥と多動を主訴としてプレイセラピー導入となった。学部生時代の Th がボランティアという形での担当となった。A とのプレイセラピーは 3 年という経過を辿った。初期において Th は身体的攻撃を受け止めることに必死であり、時に 50 分の時間・場所の枠を超えて走り回る A に振り回されていた。中期では、毎週常同的に繰り返されるプレイ内容に辟易するという感情を持ち続けるしかなかった。ただ一生懸命関わっていたものの、A の繰り返されるプレイに疲れ果てていたのである。そんな時、Th の家の留守番電話に、A の声によく似た子どもからメッセージが残されていた。Th は自分の電話番号が漏れていた（と思いこんだ）ことの衝撃と怖さが先立ち、なぜ漏れたのだらうかと思い悩み、その対処方法ばかりを考えていた。大学院の先輩に相談をすると、「なぜ彼が電話をかけてきたと思ったのかを考えてみたら？」という思いがけない言葉が返ってきた。当時の Th にとって青天の霹靂のような言葉によって、我に返り冷静になったのである。事実電話番号が漏れる確率の方が低く、偶然のいたずら電話である可能性が高いことや、何故声が似ていると思ひ込み、そしてここまで脅威を感じたのかが重要であった。しかし当然この時期の Th に答えは見つからないまま、A とのプレイセラピーの当日になった。すると驚いたことに、半年以上も変化のなかった A のプレイ内容が劇的に変化したのである。Th は啞然とするとともに、このようなものが心理療法なのかと、何か身を持って体験したのであった。

<臨床事例ヴィネット②>

設立したての臨床心理士の修士課程教育課程でのイニシャル事例をめぐる Th の体験である。この大学院で、Th が一番最初にケースを担当するという状況であった。クライアント（以下 C1）は、中学生の女性 B、軽度の発達遅滞と場面緘黙を主訴としてプレイセラピー導入となった。B とのプレイセラピーは、約 20 回の経過を辿った。Th は、B に対して最大限の配慮と誠意を持つ

て接しているつもりであった。BはThの問いかけにも、全く言葉を発することがなく、ぎこちない身体的動きながらも、バドミントン、積み木、ママごと遊びや箱庭や描画の表現などを通しての関わりをしてくれていたのだと思われる。最後のセッションでは、突然Bは、いつもよりも表情・身体を硬くして、何もせず50分を過ごした後中断となった事例である。

この時のThには、最初のケース担当者であることと、男性Thが思春期女性を担当することに気負いがあった。重ねて臨床心理士の教育過程におけるインテーク・ケースカンファ、外部講師招聘のカンファなどに、度々発表をせねばならない現実は、Thにとって少なからず影響はあったであろうし、教育環境からの様々な意図も感じられた。毎週のようになんらかの形で、この事例の発表が続き、強いられ、暴かれていくような感覚と共に、同期の院生が発表を拒むことに對してや、発表を打診してくる教員に対して怒りや忸怩たる思いが高まっていたのは否めなかった。そんな時、スーパーヴィジョン（以下SV）にて、Bの描画の検討中に、スーパーヴァイザー（以下SVor）が独り言のように「この描画を持ってきたりするのも、秘密を守るという意味では、もう超えているんだよね…」とつぶやいたことが、Thの心に突き刺さった。最後のケースカンファでは、教員に内容を叩かれるという体験がほろ苦く残ったのである。中断後に、教員の情報からBが学校で話をするようになったことを聞かされ、逆に様々な感情を整理することが難しかった。

<臨床事例ヴィネット③>

以前は心理職がいなかった児童養護施設での事例CをめぐるThの体験である。当時、被虐待児が9割を占める児童養護施設に心理職の配置が決まり、プレイセラピーの部屋を導入した。要望により同時に生活場面にも介入し、約三年かけて心理療法の意味や意義を伝えていくことで、心理職の存在が定着しつつあった時期であった。Cは小学校高学年の男子で、発達障害を疑われ、特殊なものの言いや態度から他児にからかわれ、自ら怒りを貯め込み、場にそぐわない形の怒りを噴出させるようになった。施設の不適応が主訴にて、Thが担当した事例である。初期の頃、Cは、まるでThはいないかのように箱庭作成し続け、Thはそれにつき添うことに必死であった。なににもできず、させてもらえないThは、その代償と自らの秘め事のように、プレイ後、50分をかけて箱庭表現を再現し続けた。Cのプレイが劇的に変化した後、CはThと関わるプレイをし始め、その中で「自分が寮でいじめられている」こと、そしてある時には、「Thにしか話していない内容が、自分の暮らす寮にて知られていた」ことを、責めるわけでもなく淡々とThに語ったことが印象的であった。Cは約30回のプレイセラピーの中、劇的にコミュニケーションの質が変化して退所に至ったのである。

Thとして我慢をし続けたという印象しかないのだが、Cが劇的に良い変化を見せてくれて円満の施設退所となったため、心理職の意義を決定づけた事例であったと思われる。このCとの事例もさることながら、担当した事例をめぐる施設職員とは様々な攻防が繰り返された。特に、プレイセラピーには意味があるのか、あるならば中身を教えてほしいという要請に曝され続けた。と同時に、Thは、常にC1を裏切り続けているのではないかという気持ちが付きまとっていたのである。それは臨床家としての立場から、他の職種へC1との関わりを少しでも伝えることが、ThがC1と共有した秘密の切り売りをしているのではないかと思っていたからである。

6、考察

①世阿弥の“秘すれば花”から

世阿弥は、風姿花伝において「秘する花を知ること。『秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず』となり」という示唆的な言葉を残している。世阿弥が、内にも外にも“秘する”こと、つまり秘密ということを最も大事としたのには、能楽という芸を通じて人のこころを眺めると、秘密がいかに重要な要素を占めているのかということを知っていたからである。だからこそ人にとって重要な要素である秘密を、能楽においても根本的軸に据えたともいえるのである。ここで世阿弥の言葉を引用する。

「秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず」となり。その分け目を知ること、肝要の花なり。そもそも、一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用があるゆゑなり。しかれば、秘事と云ふころを現せば、させることにもなきものなり。これを、「させることにてもなし」と云ふ人は、いまだ秘事と云ふことの大用を知らぬがゆゑなり。

概要を説明すると、「秘することこそ花だ、秘するということがなければ花ではありえない」と言われる。その勘所を知ることが、花の重要なところだ。それぞれの家（専門・技芸の）に秘事があるのは、秘密にしておくことに、絶大なる効果があるからである。しかし、その秘め事を見せてしまうと、そんなに大したものではないものである。しかし秘事を大したものではないという人がいれば、それは秘密の本当の効果を知らないからである。

まずここで世阿弥は、あえてその肝要である部分を、“花”という抽象かつメタフォリックな言葉で表現し、ある意味明確なようで明確になることがないという逆説性を説く。そして『秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず』という言葉によって、秘密の重要性と逆説性を説きながら、その意味を分かった気になってはいけないという二重の逆説を孕ませるのである。

②“変容の種”をつかむことはできるのか～事例ヴィネット①の考察から

秘密という観点からしても、当時のThは、全くもってその意味すら理解していなかった。振り返ると、それなりに専門書に当たり、守秘義務も知識として持っていた。しかしスタッフの控室では、学部生同士が集まり、ケースの内容を話していたという状況であったし、SVを受けていたわけでもなかった。先輩には相談という名目のもとに、年に数度は教員の求めのまま、ケースの内容を話していた。つまりAとThの関係の中における「秘密」に対するThの構えは、知識レベルの守秘にとどまっていたと考えられる。それは、守秘の自明性さえも了解していなかったともいえる。それでは、Thにとって自分の電話番号の流出という秘密が暴かれる体験は“秘密”という観点からして、どのような意味があったのであろうか。

ここで重要になってくるのは、この時期のThがAとの関係の中で紡がれる内容を、秘密として捉える水準がきわめて低いということである。よってThは、周囲の状況に流され簡単に内容を共有し、教員の求めにかすかな葛藤を覚えながらも規則に流される形で疑問も抱かず話をして行っていた。この時点でThはAとの関係において、Aの「秘密」が開示されていくことに無頓着であった。ましてThが、Aの「秘密」を抱えるということの意識など全くなかった。つまり“秘密”という観点からして葛藤する姿勢ではなかったところに、Thの秘密が暴かれる体験

が生じるのである。Th 自身が暴かれ、脅かされた体験は、逆も真なり A が、常に Th からされ続けていた体験でもあり、それによって A は、Th からすれば退屈な常同的なプレイをすることによって自分を守っていたと考えることができる。Th はこの体験から、未分化ながらも先輩の助言をきっかけに、Th は自分のセラピストとしての在り方に目を向けるようになる。それがプレイの内容を変化させた一因でもある。世阿弥の言葉「その分け目を知ること」、つまり文字通りの分けて知ること、もできていなかったのが、少しその分け目を知ったことで変化が生まれた。

“変容の種”にいたっては、その“種”を得ること、つかむことさえもできていなかったともいえる。一方で、Th は教員の求める内容開示に対して、若干の違和感を持っていたのも事実である。ここに教員への開示という規則・制度への秘密をめぐる葛藤の萌芽を感じさせるのも確かであろう。ここで、この時期の Th の内的状況を、世阿弥の言葉を借りて示すのであれば、Th は「秘事があることさえ知らなかった」のだ。心理療法の秘密（守秘義務）があることは知っていたが、そこに“秘密”があることは知らなかった段階であったのである。

③訓練課程における制度との関係の軸に～事例ヴィネット②の考察から

この事例での Th の体験には“秘密”の観点から、ポイントが二つある。それはまず、全く話すことをしない B を、Th は知ろう、理解しようとして続けていたということである。度重なる事例発表も当時は侵襲的に体験していたものの、どこかで Th が無意識的に B のこのことを知りたいという欲望を働かせていたことは否めない。B は緘黙という「言葉で自らの秘密を開示しないという選択をしていた状態」であったとも捉えられる。そのような B に対して Th は、あらゆる配慮的な行動を持って関係を作ろうと模索し、訓練課程らしく自分自身のための欲望もあらゆるところで働かせていた。Th は無意識的に B の秘密を暴こうとし続けたが、B は Th との関係性を箱庭や描画という形をとることで妥協点を探る。この際 Th は B の「言葉で自らの秘密を開示しないという選択」に気付くことはできなかった。ここでの“変容の種”は、この B のこの在り方に気付くことであったであろうし、そしてこの時点での Th では、世阿弥の言葉を借りると「その分け目を知ること」、つまりは勘所を知ることではできなはずもなかった。

もう一つは Th の訓練課程という制度との関係における葛藤である。Th は B との関係で紡がれる「秘密」を、自らの臨床家としての成長のために、葛藤しながらも事例発表や SV において開示する。それは第三者からの要請への攻撃性や苦しさといった自己愛的な気持ちにも取って代わることもあった。しかし SVor の一言によって、その葛藤の浅さを思い知らされることになった。それこそどんなにクライアントの「秘密」を大事にしようとしてもかなわないのではないかとも思えるような衝撃であった。ここに“秘密”の逆説性へのかすかな自覚が立ち上がったと思われるのである。いわば“変容の種”を得ることができつつあるような段階である。しかしそのような葛藤はなくなるわけがないのが現実なのである。

世阿弥の言葉を借りるなら、どうやら「秘事（秘密）」というものがあることを知り、いわばその中身を欲望しつづけるがゆえに「秘密」の逆説性に葛藤しながらも、本当の“秘密”を意識できなかったともいえるであろう。

④社会において～臨床ヴィネット③の考察を中心に

児童養護施設という現場では、療育と心理臨床という互いに異なる立場でいながら、子どもの成長・発達に関わるという共通の目的をもった専門家同士の連携において、守秘に対しての

柔軟な対応（北添ら，2005）が必要であった。確かに心理臨床の土壌を培うために結果も求められたのも事実であった。ゆえにここでは臨床家の行う心理療法の、社会の中で行使されるものであるからこそ、Th の葛藤が浮き彫りになってくる。

Th が、現実的に心理職として、どう生き残るかという問題に直面化させられる中で「秘密」を守ろうとする面と、その生き残りのために Th と C1 の“秘密”を小手先で開示するという面において生じた葛藤であったとも考えられる。しかし後者には、小手先の開示をしてしまうことによって、Th が C1 に罪悪感を持つという葛藤も位相を変えて生じているのも確かである。ここに“秘密”の逆説性の、二つの次元と二重性が明らかになる。付け加えて、以下にて詳細に考察を続けると、同様のことがより複雑性を増して理解可能となる。

Th は、C のいじめの内容を、施設の保育士に報告することもできた。実際には Th の気持ちは報告するのか揺れていた。Th にしか話していない内容が、他の児童に知られていたという出来事も、Th は実際に保育士に何も話してはいないのである。ここで重要になってくるのは、前者のいじめられていた事実をめぐる“秘密”と、後者の何故か知られていた“秘密”の質が、Th をめぐって次元が異なるということなのである。つまり前者は C の告白を、Th は心理療法の中で収めたという意味で「原理的な二者関係の心理療法の中で浮き彫りになる」次元に属する。後者は C の語りの内容は、第三者の心理療法からの侵襲とみると「第三者、現実社会、制度、規則、環境との関係」の次元に属していると考えられる。そして後者の出来事では、Th は結果的に何も開示していない。ゆえにこの出来事は、“秘密”をめぐる「原理的な二者関係の心理療法の中で浮き彫りになる」次元に属しながら、「第三者、現実社会、制度、規則、環境との関係」の次元に、偶然を介して属するともいえるのである。

このエピソードも、“秘密”をめぐる逆説性の二つの次元に分けることができながら、後者はその両方を包含するという意味で、世阿弥の「秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず」という秘密への二重の逆説性が、ここに立ち現れてくるのである。この二重性は、前述した実際の現場にて、臨床家が“秘密”という“変容の種”の取り扱いに困り混乱をきたすことが多いことを如実に示している。次元の異なる逆説性に Th が取り込まれ、そして現実的には、それをめぐって具体的な対人関係の綾が張り巡らされるからである。よって実際の臨床現場に参入すればするほど、このように秘密の逆説性は、縦糸にも横糸にもなり絡まりあい綾が広がり複雑にならざるを得ないのである。実際の臨床の瞬間では、考察のような分別はなかなか不可能である。それこそ「その分け目を知ること、肝要の花なり」なのかもしれない。

そしてもう一つ重要なことが「秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず」の二重の逆説性を元にして、二つの心理臨床的理解が可能になってくるのである。臨床事例ヴィネットの①～③では、その心理療法過程において、Th は常に C1 を知りたい、理解したいと望みながら、ドラマのような展開がいつも訪れるわけでもなく、結局のところ何もわからなかったのである。我々の行っている心理療法の空間は、いわば現象学的にみれば、何も劇的な展開が生じる場ではない。例えば、事例 B や C のように沈黙がその空間を包んでいるときもあるし、ただ Th の現前で、淡々と描画や箱庭がなされるときもある。いうなれば、その空間にあるものはふたを開けば、世阿弥の述べる「させることにもなきもの」なのである。

土居（1973、1985）は、心理療法において秘密は明らかにされながらも、それは再度秘密に

ならねばならない、というプロセスの重要性と、世阿弥を引用しながら秘密にする事柄が大事ではなく、秘密にすることこそが大事と述べている。秘密は秘密にすることが大切であり、その本質はとるに足らないものである。ではそのような大したことない物事を、なぜ秘密にするのか。そのプロセスこそが、人のところにとって意味があるとも考えられるからである。つまり心理療法のクライエント—セラピストの関係において紡がれる秘密は開かない（それはプロセスとは違い一度も明かさない）ことにこそ意味があるのである。

7、結語

前述のように世阿弥は、秘することの逆説性を“花”という言葉で止揚することで、秘密は秘密のままである必要性を説いている。心理療法では、①クライエントの秘密はそのまにされること。②セラピストは、セラピストとクライエントの関係における“秘密”（文字通りの語られない）として、そのままにしておくこと。③「“秘密”は何か」と問うことのみ状態であることによって「セラピストの器において秘密＝“変容の種”のままにしておく」こと。そして①～③を通して「“変容の種”が、やがてクライエントの中で発芽し“花”として開くこと」を、傍で見つめていくことがセラピストの仕事であり、その過程が心理療法なのではないだろうかと考えている。とはいえ、事例で提示したように、我々セラピストは、常に第三者からの秘密の開示に直面し、“セラピストの器において秘密のままにしておく”ことは簡単にできうることでないことも理解できるであろう。従ってセラピストにとっての最重要事項は、秘密の原理原則に則り、クライエント—セラピストの関係性から紡がれる“秘密”を「セラピストの器において“秘密”のままにしておく」という原理原則へのプロセスを、逆説的に体験し続けることにある。その逆説的体験は繰り返されることになり、これまた逆説的プロセスにて体験し続けることで臨床家のところが育てられるのではないかと考えるのである。

最後にこの論述から、筆者が明らかにしたかった単純なことを述べる。それは「秘密」こそころそのものだ、ということである。ゆえに“秘密”も、ころそのものであるからこそ、二者関係において「秘密」をめぐる逆説的になるのも、「人のころそのもの」の在り様でもあるのだ。従って「秘密」を“変容の種”と定義づけるならば、“変容の種”も、ころそのものであり、二者関係において「秘密」をめぐる“秘密”の逆説性自体も、人間のころそのもの、ということになる。秘密とは、人間のころそのものであり、そのころとは次元や位相を超えて立ち現れるものである。我々臨床家の行う心理療法は、その原理的な二者関係における次元の“秘密”と、社会という第三者を含んだ関係性の次元の“秘密”をも含んだころを、取り扱うということに自覚的になる過程さえも、包含することで進んでいくものであろう。

本論において、社会という第三者の「抱える機能」については、ヴィネットの中でわずかに触れるのみとなった。今後はこの機能との繋がりについて考察を深めていくのが課題である。

引用文献

- 土居健郎(1973) 秘密の観点 「精神療法と精神分析」(第12刷) 金子書房.
- 土居健郎(1985) 表と裏 弘文堂.
- 江畑敬介・前田雅英・樋田精一・村上雅昭・中谷真樹・小田潤(2003) 地域ネットワークの形成を
守秘義務との関係に関する研究 精神神経医学雑誌, 105 (7), 933-958.
- Freud, S(1938) Abriss der Psychoanalyse, 「精神分析概説」小此木啓吾訳 フロイト著作集9
人文書院, pp156-209.
- 長谷川啓三(2003) 学校臨床のヒント Vol.1 集団守秘義務の考え方 臨床心理学 第13号
pp122-124, 金剛出版.
- 東山紘久(1999) 専門的秘密と守秘義務 京都大学大学院教育学研究科紀要 (1999, 45), 45-56.
- Hillman, J. (1964) SUICIDE AND THE SOUL, Hodder and Stoughton, London ヒルマン, J. 著 樋口和彦・武田憲道訳 自殺と魂 創元社.
- Hippocrates 古い医術について―他八篇 小川 政恭訳(1963) 岩波文庫.
- 金沢吉展(2006) 臨床心理学の倫理を学ぶ 東京大学出版会.
- 金関猛(1999) 能と精神分析 平凡社.
- 河合隼雄(1987) 子どもの宇宙 岩波新書.
- 河合隼雄(2013a) 新版心理療法論考 河合俊雄編 心理療法における場所・時間・料金について
pp140-156 創元社.
- 河合隼雄(2013b) 新版心理療法論考 河合俊雄 事例研究の意義と問題点 pp207-216 創元社.
- 北添紀子・渋谷桂子・岡田和史(2005) 学校臨床における守秘義務および他職種との連携に関する
意識調査―教員、臨床心理士、精神科医の比較 心理臨床学研究 23(1), 118-123.
- 松木邦裕(2005) 私説 対象関係論的心理療法入門 金剛出版.
- 西井克泰(2003) 学校臨床心理士(スクールカウンセラー)の倫理と責任性: 守秘義務をめぐって
武庫川女子大学紀要. 人文・社会科学編 51, 81-90.
- 前田重治(1999) 「芸」に学ぶ心理面接法 初心者のため心覚え 誠信書房.
- 森岡正芳(2010) 心理療法と能楽 初心・物まね・離見の見 能と狂言 8 pp100-108 ペリ
かん社.
- 新村出(1988) 広辞苑 岩波書店.
- 日本臨床心理士会(2009) 倫理ガイドライン 日本臨床心理士会倫理綱領 pp59-63 日本臨床心
理士会 第7期倫理委員会.
- 小此木啓吾(1980) 笑い・人みしり・秘密 心的現象の精神分析 創元社.
- 小此木啓吾(1986) 秘密の心理 講談社現文庫.
- 坂井新(2012) 複式夢幻能における心理臨床的意味の概観 京都大学大学院教育学研究科付属臨
床教育実践研究センター紀要 第16号 pp121-132.
- 白川静(2003) 常用字解【第二版】平凡社.
- 世阿弥 風姿花伝・花鏡 小西甚一編訳(2012) タチバナ教養文庫.

(臨床実践指導学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2013年9月2日、改稿 2013年11月28日、受理 2014年1月16日)

A Study on Psychotherapist Confidentiality: Learning from Zeami's “Keep It a Secret”

SAKAI Arata

The aim of this paper is to explore what a secret is for psychotherapists by reconsidering the obligation to keep official secrets in clinical practice. First, I define a secret as “a seed for transformation” to question what a secret means in psychotherapy. Then, I reconsider the obligation to keep official secrets in clinical practice. I reveal that psychotherapists struggle in a paradoxical situation about secrets, and I also define the paradox of a secret. I then find that this paradox has two dimensions: the two-person relationship in fundamental psychotherapy and the relationship with surroundings like the institution and or system. I also found entangled in each of these dimensions a double paradox. Through considering three vignettes from my clinical experience, I clarify the process whereby psychotherapists come to realize the paradox of a secret. And I find a clue to “keeping it a secret” in a clinical practice situation, which is a theme in this paper, by learning from Zeami’s well-known words. I conclude that the work of the psychotherapist is “living the paradox of the secret” and that a “secret” in a psychotherapeutic relationship is the psyche itself.